

## 9 歳児に関する臨床心理学的一考察

小林 良 夫

### 1 はしがき

人間が成長する過程において、特徴的な思考あるいは行動様式を示す時期のあることについては、既にせき積学の教えるところである。すなわちアニミズムとか、反抗などといわれるものがそれである。

そして、例えば反抗する時期について、従来の発達心理学や教育心理学は、3・4歳ころの第1次反抗期と、13・4歳ころの第2次反抗期の2つに分け、しかもそれは「自我意識のめざめ」の言葉に代表される成長の証と意識づけ、養育上あるいは教育上十分配慮すべきであると強調してきた。

しかし筆者は、鑑別臨床33年の体験から、適応の問題を考える上において9歳を3・4歳に次ぐ第2の危機として認識し、対応する必要があることを痛感した。

というのは、もし養育者が、9歳を危険な曲り角として捉え、かつ対応してくれていたならば、当事者である子どもが年ごろになって泣き、またその親が、年をとってから泣かされなくてすんだであろうと思われるケースに、数多く接してきたからである。

そこで本稿では、子どものより良き成長を願う見地から、9歳が曲り角にあるという実態、それに対する養育者の認識の程度、曲り角出現の個人的背景およびそれへの対応などの点について考察を進め、若干の提言を試みようと思う。

### 2 曲り角の実態

第1表は、筆者が昭和59年、N少年鑑別所の協力を得て、同所に収容されている男子少年100名を対象にして行った問題行動初発年齢調べの結果である。<sup>①</sup>

第1表 問題行動初発年齢調

問題行動 年齢	教師に反抗	イキがり行動	怠学	家財持出し	家出	喫煙	飲酒	性経験	薬物濫用
7				2			1		
8				2					
9			2	12	1				
10									
11						2			
12	2	2	7	12	1	5	5	1	
13	17	19	11	23	20	26	7	3	11
14	39	41	33	19	27	20	23	21	26
15	33	33	35	17	27	34	31	36	24
16	7	2	7	10	16	10	23	28	31
17	2	2	4	2	8	3	6	7	4
18							5	3	4

注 1. 数字は%

2. 問題行動とは、一般に不良行為と呼ばれているもの。

表からも知られるように、問題行動のほとんどが13～15歳に集中して現れているが、それに次いで多いのは9歳であり、しかも主な内容が「家財持出し」となっている。例数が少ないので結論は留保したいが、初発年齢が9歳という事実は注目に値する。

樋口幸吉も「非行の初発は、ブーゼマン(Busemann)<sup>②</sup>のいう反抗期の第3段階にあたる8～9歳にはじまる」といい、また現に矯正教育を受けている少年院生<sup>③</sup>たちも、このことを肯定している。

9歳が問題を起しやすい、あるいは取扱いにくい年齢であるという例証は、他にも求めるこ

とができる。すなわち、9歳児を持つ母親の多くが「今までと違って、素直に親のいうことを聞かなくなった」「よく拗ねる」「遠くにいる友だちの家へ出かけるようになった」といい、また小学校の教師も「3年生のころから万引きが始まる」「教師を批判する」「同性同士のグループを作る」などと指摘している。

このように、9歳という年齢は人生の節目の1つであり、曲り角なのである。

### 3 親や教師の認識度

2のところでもふれたように、9歳という年齢は、幼児期から児童期へと実質的に転換する年である。それだけに処遇上重要な年代といえる。

しかし9歳児の自己主張は、3・4歳のときのようにガムシャラでなく、また13・4歳児のように強烈かつ複雑でもない。そんなこともあって、ともすると親も教師も、9歳の危機の存在を無視したり、見逃したりしがちとなる。

このことは、収容少年たちの親がよく口にする「うちの子は、小学校時代は素直で、おとなしかった」という言葉や、小学3年生の親たちの学級懇談会への出席不良、更には、学校における職員配置の現状にも見ることができる。

学校側の対応について、野田義一<sup>④</sup>は、

「一般的に、小学2・3年生というのは比較的安易に考えられ、軽く取扱われている傾向がこれまでであったのではなかろうか。たしかに1年生は、家庭または幼稚園から学校という全く新しい世界に子供たちが移った時期であり、その扱いは慎重になされねばならない。そして6年生もまた中学校への移行のための準備の時期であり、比較的優秀な老練な教師がこれらの学年に当てられがちである。

これに対して中学年の子供は既に学校生活にも慣れ、これに十分適応しているために、とかく若い経験の少ない教師がこれに当てられやすい。(略)

しかし我々にとって大切なのは、転換期というものは危険な時期であり、“これを如何にのりこえるか、”ということには十分な配慮が加えられねばならない、ということである。」と述べている。まさにその通りである。

### 4 曲り角出現の背景

再三述べているように、9歳という年齢は取扱いのむずかしい、それでいて重要な年である。このことを明らかにする一助として、9歳児が所属するであろう小学3年生と、4年生の子どもの特徴を素描してみる。

子どもが3年生になると、今まで以上に活動的あるいは積極的になり、例えば、遠くにある友だちの家へ自転車でお出かけたりするようになる。また知識欲も旺盛で、多くのことに関心を持ち、それに挑戦するようになる。更に自分に都合の良いことはしゃべるが、都合の悪いことには口をつぐんでしまったり、力のある人を尊敬するなどの特徴を示すようになる。

4年生はというと、やたらとむずかしい本を読みたがるようになり、また字もきれいに書けるようになる。更に個性がはっきりし、個人差が目立つようになる。そんなこともあってか、学級内のまとまりも良くないといわれている。

以上のようなことから、この年代を「感情独立期」「ギャング・エージ」「ケシゴム時代」「認識転換期」などと呼ぶ学者もいる。

そこで、上記の言葉を概説しながら、9歳児が取扱いにくいといわれる理由および、なぜ曲り角が出現するのかという背景の1・2を明らかにしたい。

#### (1) 感情独立期

品川孝子<sup>⑤</sup>は、この期を次のように説明している。すなわち

「いままで、うれしいにつけ、悲しいにつけ“お母さん、”だったものが、もうそんな大人の保護を必要としなくてもよい実力が身についた子どもたちは、なにかにつけて親の命令や援助の手を無視しようとするようになる」

つまり、大人への同一化から自らを解放して感情的に独立しようとするわけである。ここに「今までと違って、素直に親のいうことを聞かなくなった」と嘆く親の繰り言の一因を認めることができる。

このように“独立へのあがき、”の始まるのが9歳なのである。

#### (2) ギャング・エージ

小学1・2年生は、すべての面で幼児っぽく、考え方も体つき同様自己中心的で、依存の対象も親や教師に限られており、友だちとのつきあい範囲も狭く、かつ浅い。

ところが9歳となると、ホームグラウンドは家庭や学校ではなく、同性の遊び友だちとの生活へと移行し、交際のし方も深く、グループのメンバーも5～6人と大きくなっていく。

渋江芳夫<sup>⑥</sup>も、「自分の身のまわりにいる好きな人」として男子の58%、女子の56%が、同性の友だちを挙げていたと述べている。

以上のことから明らかなように、このころの彼等にとって大切なものは親や教師の指示ではなく、友だちとの約束や友情であり、更にはそのグループ内において安定した地位を確保することといえそうである。従って彼等は、衣服、持ち物、言葉遣いなど多くの面で友だちに同調するばかりか、大人や他のグループに対抗したり、グループ毎の秘密を持ったりする。そして友だちがやろうとすれば、万引きだって平気でやってしまうことになる。

このように“われわれ意識時代”、“徒党時代”のさ中にあるのが、彼等9歳児なのである。

### (3) ケシゴム時代

交友範囲の広まりや、つながりの深まりなどに基づく社会性の発達につれて、自己意識は強まり、現にある自己を他人と比較するようになる。その具体例を、ケシゴムの使用回数の増加に見ることができる。

すなわち、小学3年生は幼稚園時代や、1・2年生のころと違って、自分の書いた字の上手・下手がわかるようになる。そのためケシゴムの使用回数が増えるというのである。

そんなことから、品川孝子はこの時代を“ケシゴム時代”と評している。

### (4) 認識転換期

認識とは「多くの精神活動を通して、対象とするものの法則や原理を抽象化したり、総合したりする作用をいう」とされている。

この認識のし方に変化が見られてくるのが、9歳ころである。このことは前に掲げた野田義一の「教育学的認識論」に詳しいが、同書より

要約して示すとおおむね次のようである。

そもそも幼児というのは、“花が笑っている”などというように、すべての物には心があるという捉え方、すなわち感性的な認識をする。しかし年齢が長ずるにつれて、第三者的立場から多くの要素を全体的に眺め、かつ1つの概念にまで結晶させていく。つまり悟性的な認識をすることができるようになる。このように、感性的な認識のし方から、悟性的な認識へと質的に転換する時期が、小学3年ころだといっているのである。

してみると、このことは、認識のし方が大人的になったことを意味するだけでなく、次に控える青年期の理性的認識への橋渡し役を果たすことにつながるだけに、重要な意味を持つものといえる。

### 5 9歳と不適応行動

4において、9歳を代表する言葉4つを挙げ、その解説を試みる中で9歳児の特徴等を明らかにするとともに、曲り角出現に至る背景の解明につとめてきたが、これらのことと、問題行動との結びつきの実際にふれることが少なかったため、以下の2点を取りあげ、若干の考察をしておきたい。

その1つは、適応へのつまづきの原因ともなりがちな算数嫌いの始期にかかわる問題であり、今1つは、問題行動のはしりともいえる家財持出しと、万引きという非行の始まりに関する事についてである。

まず、算数嫌いが小学3年生の後半から始まることについてふれる。すなわち、このころから分数および小数の問題が出てくる。これは整数の加減乗除と違って抽象的思考を必要とする。いうまでもなく1あるいは $\frac{1}{10}$ というのは、具体的であるので自分の目で確認できる。従って了解も可能となるが、0.1となると直接目にする事ができないので、その理解は容易でない。そんなことが作用して算数嫌いが始まるのである。これらのことは、岡山大学（「教育ジャーナル」'78年6号）等の報告にくわしい。

いずれにしろ、算数嫌いが始まるのが9歳であるから、仮りに基礎がわからないまま進級し

たとすると、勉強嫌いや学校不適應に発展する可能性も大きい。

次に、万引きが9歳ころから始まり、しかもその対象としてケシゴムが選ばれるということについてふれる。

第1表からも明らかのように、小学生の問題行動は家財持出しから始まる。ここで問題となるのは、持出した金の使途である。たしかに昭和35年ころまでは、その金で飴玉などの甘味品を買っていた。ところが最近<sup>あめ</sup>はケシゴムなどの文房具に変わってきている。

その理由として、“飽食時代”の言葉に代表されるように、物が豊富になり、生活水準の向上が見られるために飴玉の魅力は下った。それに引きかえ最近のケシゴムは形、色、香ともに優れているため魅力ある物となった。しかも彼等はケシゴム時代のさ中にある等のことが作用して、欲求の対象が変わってきたのであるが、しかし以上のことにも増して、彼等が徒党時代を生きていることを忘れてはなるまい。

すなわち、当該児童が、自分の所属する集団内において安定している場合は別として、そうでない場合はボスにとりいるとか、子分を作るとか、あるいは他の方法を用いて自分を誇示したりする必要に迫られる。このような場合、あり余る菓子類よりも、先に挙げた魅力あるケシゴムが格好の貢物になったり、子分を作るに必要な品物として選択されるであろうことは想像に難くない。ここにケシゴムが万引きの対象となる理由がある。

いずれにしろ、このころから、不適應の芽はふくらんでくるのである。

## 6 対応への提言

問題行動に走り、それが故に泣いている多くの青少年を見ていて痛感したことは、既に述べたように、もし養育者が、9歳児をしっかり見つけ、適切に処理してくれていたならば、ということであった。このような見地に立って、以下対策の如きものを考えてみる。

(1) 養育者は、9歳児の心理および処遇の重要性和困難性を認識しよう

知っている知らないとでは、その結果に大

きな差の出ることはいうまでもない。“理解は指導に優先する”という生徒指導の原則は、ここでも活かされねばならない。養育者は、このことを十分意識し、子どもを、しっかりみつめて欲しいものである。

といて、そのみるは、ボーッとみる“覧”ではなく、目に見えないものをみるという意味を持つ“観”<sup>み</sup>るでなくてはならない。

(2) 9歳は、飛躍の節目と理解しよう

今更いうまでもなく、この年齢は、どの子も必ず通過せねばならない関所であり、関門である。“竹に雪折れなし”のたとえの通り、節は成長のために是非とも必要である。

このように考えてもらえば、取扱いに手こずる養育者の苦悩も、自ずと喜びに変わるであろう。

(3) 「はしか」の看病方法を、9歳児の処遇に活かそう

はしかの治療に必要なのは、初期における適切な処置だといわれている。9歳児の処遇も全く同じだと思う。従って、9歳児の前段階にある3・4歳児の処遇が適切であれば、この時期はおろか、13・4歳のそれも軽く推移するに違いない。

(4) 9歳児を受持つ教師の配置を考えよう

小学3年生を長く担任したことのある教師は、異口同音に「この時期に良き指導を受けた児童は、高学年になって作業を嫌ったり、教師の指示を無視したりしない」といい、また多くの中学校教師もこの説を支持する。

従って学校管理者は、経験の浅い、あるいはそれに類する教師を3年生の担任にすることを避けることが望ましいし、仮りに受持つことになった経験の浅い教師は、むずかしく、そして重要な年齢層の子どもを担任しているのだという自覚と責任を持って、その指導にあたらねばなるまい。

なお、このような処置が一日も早く実現するよう、親の理解ある協力を希望したい。

## 7 あとがき

「9歳の壁」ということが言われて既に久しい。この言葉が、健常児の教育にもあてはまることは、適應へのつまづきのところで述べた通

りである。

しかるに、9歳児に対する世人の認識は必ずしも高くない。なんとしてもこの現状だけは改めねばならない。そのためには、「はしがき」の所でふれたように、現在いわれている第1次反抗期の次に、第2次として9歳をセットし、その意義などについてP・Rすることを提案したい。さすれば親、教師の意識はもとより、9歳児を見る目や取扱い方も変り、ひいては、青少年の健全育成に役立つこととなるであろう。

最後に、読者諸賢の忌憚なき御教示をお願いしたい。

主なる引用文献

- ①小林良夫著「十四歳は厄年」 春秋社
- ②樋口幸吉著「少年非行」 紀伊国屋書店
- ③中部矯正編集部編「いま 僕たちは」 名古屋矯正管区
- ④野田義一著「教育学的認識論」 お茶の水書房
- ⑤品川孝子著「反抗期の導き方」 国土社
- ⑥( 渋江芳夫 )  
福沢周亮編「三年生の心理」 大日本図書